

第6回 今後の県立高校の在り方検討委員会 議事録

日 時 平成28年10月6日（木）

13:00～16:00

場 所 サンラポーむらくも 彩雲の間

1 会長あいさつ

皆さん、こんにちは。お忙しい中お出かけいただきまして、ありがとうございます。

台風一過ということで、久しぶりの秋らしい空が広がっています。前回、第5回は浜田市、江津市で公聴会を開催させていただいたわけですが、その前の晩も、確かすごい嵐の日だったと思います。本委員会12名の委員のうちの9人の委員にお出かけいただき、地域公聴会を無事に開催させていただきました。当日は天気もおさまり、よい公聴会になったのではないかと思っております。

本日は公聴会にご出席いただいた委員のうち、台風の影響等で4人の委員がご欠席ですが、前回、都合のつかなかった2人の委員にも加わっていただきまして、次第にございますように、江津市エリア及び浜田市エリアにおける県立高校の可能性について、少し広く構えた県西部・石見地区といった視点からの議論をしてみたいと思っております。公聴会での議論も確認しながら、きょうはこのことにたっぷり時間を注ぎたいと思っております。いろいろなご意見をお聞かせいただければありがたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

2 議事

【議題1 江津市エリア及び浜田市エリアにおける県立高校の可能性の検討について
～次期再編成基本計画に向けての検討課題の論点も踏まえながら～】

（資料1を事務局より説明）

○委員

浜田は、意見陳述者が行政、各学校と連携をとって、意見をまとめて発言されたのに対して、江津は、行政と意見陳述者が意見統一をされていなかったのが残念だったと感じている。あと、一番大きかったのが、意見陳述者に、「青年会議所、もしくはPTAで意見統一はされていますか」と伺ったところ、「されていない」という回答だった。ところが、報道では個人の意見が前面に出てしまい、その発言が今後の在り方の流れなのではないかと思われる方が江津で大変多くおられるのが、残念だったと思っている。

○委員

専門高校の場合は、それぞれの学校が石見部、西部唯一の専門高校であるというところから、江津、浜田、あるいは石見地区一帯で学校のポジショニングをしていくという意見が強かったように思う。その裏返しというか、普通科高校と専門高校の統合ということには、やや否定的、特色が薄れるという意見もあったように記憶している。普通科高校の場合は、江津、浜田を一体化して考えるのか、別々に考えるのかというところは意見が分かれたところではなかったかと思う。

○委員

専門高校について、時代の流れ、地域のニーズに即した学科への見直し、あるいは地元企業の要望に応えた人材の供給ということが皆さんのご要望であったと思う。工業教育、あるいは商業教育等の専門教育の方向性だが、特に石見地域全体としてということになるとなかなか難しい部分もあり、県全体として言えることなのかもしれないが、その方向性について、皆さん方の視点とは違うことになるかもしれないし、論点と少しずれるかもしれないが、何点かお話をしたいと思う。

第1点目として、入り口である生徒募集の関係もあるのだが、専門高校の場合は、基本的にまだ、工場とか個人の企業に就職する者がほとんどであるといった、少し偏ったイメージがあるのではないかな。もう1点は、学力に自信のない者が行くのだろうかというようなイメージが残っているのではないかな。したがって、やはりこういったマイナスのイメージを払拭していくことは、大事だろうと思う。そのために、教育内容について工夫や充実をすることが大切だろうと思うし、それ以上に、魅力の発信というか、情報の発信をしていくことが必要だろうと思う。情報を発信することによって、目的意識の高い生徒の確保を目指す。最近、ドボジョ（土木関係の女性）、あるいは、ねじガールといった女性の活躍が見られるように、女子の志願者につながっていくのではないかなと思う。

石見部の女子の工業科在籍者数は、10年前に比べて2倍近くに増えているが、この傾向は多分続いていくのだろうと思っている。それから、商業科の関係だが、この石見地域においては在籍者数が10年前に比べて半減しており、商業科についてはそういう傾向だろうと思っている。卒業後も半数が進学するという事になっている。この商業科に入学してくる子供たちが、どういう動機で入学をしてくるのか。例えば、卒業後は就職を目指すという目的意識を持って入ってくるのか、あるいは、本来は進学を目指したいが普通科では勉強が厳しいので、一応商業科に入って一定の勉強をして、上級学校へ進学しようとか、いろいろなパターンがあるのではないかな。公聴会で、「子供たちの考え方も少し知っておいたほうがいいのではないかな」という発言が何人かにあったと思うが、このことは大切なことで、そのことが、分かるとよいと思っ

ている。

2点目だが、時代の流れに沿ったカリキュラムの導入が必要だろうと思う。卒業までに一定の学力を保証していくこと、一定の資格をとること、これは今でもやっておられると思うが、一定割合の人は、上級学校への進学を目指しているという実態があるわけで、こうした子供たちの興味・関心・能力に応じたカリキュラム編成、いわゆる教育内容の工夫をしていくことが必要ではないか。そうすると自然に子供たちも集まってくるのではないかという気がする。あわせて、学校での教育と職業教育を同時に進める、いわゆるデュアルシステムというのがあるが、職業教育と学校での、いわゆる座学と実習を積極的に取り入れていく必要がある。地元の企業にもご協力をいただきながら、意識啓発を行っていく必要があるのではないかと考えている。

3点目だが、総じていえば専門性を活かせる就職、もう一つは上級学校へ進学、これは明らかにアンケートの結果等でも出ているが、一定程度確保するように努めていくことが必要だろうと思っている。特に、就職に関しては、工業系では製造業が多いだろうと思っているし、商業系については事務や販売やサービスが多いわけだが、最近では、それにこだわらず、工業系でもサービス業へ行く生徒も多いわけだし、商業系でも生産工程への就職が見られるなど、専門と関連しない就職、いわゆる他職種への就職も増えている。したがって、従来のこうした実績に左右されない仕事の内容を見きわめることが必要ではないか。そうした意味でインターンシップとか現場実習の強化を図っていく必要があるのではないかと考えている。その方向性という意味では一般論過ぎるかもしれないが、そういう方向だろうと思う。

最後に、この会は基本的に方向性、あるいは望ましい姿を検討すると、3回目に会長もおっしゃっていて、新しい学校をつくるとか、なくすとかということではない。もちろんそうだろうと思う。したがって、石見部における専門教育というのは、基本的に生徒数の減少傾向が続くとすると、専門教育の質を上げていくという意味で、拠点校方式が望ましいと思う。一定程度、専門教育、あるいは工業系、商業系、農業系、そのような形でやっていく必要がある。そこへ通えない人については、サテライトのような形もあり得るかもしれないし、そういった方向性を考えていくことが必要だろうと思う。それをやっていくためには、寄宿舍、寮の整備をしていく、あるいは通学への配慮をしていくということが、肝心なのではないかと思う。

○委員

石見地域全体を視野に置いた工業教育、商業教育の方向性をどのように考えるかということだが、これは前回、それからその前、石見地区の各学校のいろいろな情報を事務局から出してもらった。現状として、江津に工業高校、浜田に商業高校と水産高校があるわけだが、この専門高校における、工業、商業、農林、水産という分け方に、だんだん限界が来ているのでは

ないか。前々回もお話いただいたと思うが、一方で教員免許の関係があって、例えば、専門の工業科目は工業の先生が担当するとか、商業であれば商業の先生が担当するというような縛りがどうしてもあるので、本当はこういう教育が望ましいのだが、できないとなる。ただ、今後、新しい学習指導要領では教科横断的なものをしていくという方向性も、多分、出てくると思う。既に教員免許を持っておられる方はなかなか難しい問題があるだろうが、これからは、教員が複数の教科の免許を持っていないといろいろな難しい問題が出てくるのではないか。資料1には、観点として専門教育、普通科教育、在り方全般となっているが、専門教育の中で商業だとか、工業だとか前面にならないほうが良いのではないか。例えば中学生が高校に進学するときに、「あその学科のこういうのがあるから」という理由で実際にどれだけ選んでいるのか、これは別に今に始まったことではないのかもしれないが、漠然とした意見で申しわけないが、そんな感じを持っている。

○肥後会長

確かに、今までは学校が工業なのか、商業なのか、水産なのか、非常に狭い縛りになっていて、看板自体が子供たちにとって魅力的だったろうかということもあろうかと思う。それから、今後の高校教育を考えたときに、一つの論点は3年間で子どもの資質、能力をどこまで育成するのかというイメージが、昔とは随分違うのではないかと思う。いわゆる、即戦力がどのくらい求められるのかということも随分違ってきているのではないか。3年で高校を出て働こうという意識を持っているかどうかということだが、その働こうという意識が弱いことと進学する割合がどういう関係にあるのかはわからないが、今の中学生の志向として、「早く社会に出て働こう、だから商業、だから工業」という目的意識を持って本当に進学しているのだろうかという問題はあろうかと思う。

○委員

例えば高校卒業後すぐに働くとか、働く人たちの姿は、ふるさと教育の効果もあり、以前よりは小学生、中学生にとって近くなっている。そういう姿を見ることも大変増えてきているのは確か。ただ、子供たちのイメージの中で、中学や高校を卒業してすぐ働こうというところにいるかは分からない。先ほども、工業、商業といったはっきりとした枠組みではなくなっていて、その2つが微妙に重なり、商業、工業、農林、水産、情報などがいろいろな形でクロスして、私たちが知らない職業がどんどん生まれつつある中で、子供たちも、だからこの高校とか、この仕事という選択は、難しいと思っている。ただ、地域のために頑張りたいとか、何か社会の役に立てる人になりたいとか、そんな気持ちは持っている。それが3年後に即ということではないような気もしている。また、それではやはりまだ力として足りないのではないかと感じている。

○委員

先日の公聴会は本当に貴重な場で、行けてよかったと思った。今後の高校の在り方をどう考えるかという中で、改めて、現場の方々、地域の方々の声を明確に位置づけていく必要があると思った。私自身が普段の仕事とか、こういう場で想像し、思っていたことと、違う部分もたくさんあり、気づかされたこともたくさんあった。そういう意味で、学校現場に行きたかったと終わってみて思った。今後、会場を学校にするとか、学校を見に行くとかあればよいと思った。

二つについて、位置づけが不明確、私の中でずっと腑に落ちなくてしゃべられないので教えていただきたい。一つが、全体の県立高校の再編の中での浜田と江津の位置づけということ。資料1の教育長の答弁のところで、次期計画の基本理念を探るためのリーディング・スタディだとはっきりあったので、そういう位置づけで改めていいのかと何となく腑に落ちたが、浜田・江津エリアの再編、高校の在り方を考えるということと、この会がどこまでコミットをするのかという方向性が少しわからない。もう一つは今回の会の位置づけだが、結果的に委員も少ない中で、きょうの場において、方向性が決まってしまうのか。この2つが私の中で腑に落ちなくて、なかなかしゃべれないと思っていた。

○肥後会長

2番目に関しては、答えは簡単だからお答えするが、きょうここで決まるものは何一つない。きょうは、前回の公聴会を受けて、皆さん方が思われたことや、その後いろいろお考えになったことについて、さまざまな意見をお出しいただくというのが趣旨なので、何かを言ったから決まるとか決まらないということは、一切ない。

○委員

もう一つの方向性、浜田、江津の高校の在り方について、ここの委員会でもどこまで何を出すのかということについて、もう少しイメージがあれば教えていただきたい。

○肥後会長

私が答えるよりも、事務局でお答えになっていただいたほうがいいのかもかもしれないが、私の認識は、例えば、どこの高校をやめるとかやめないとか、統廃合の具体をこの会で決めるような、そういう役割を負った委員会ではないということがまず一つ。ただ、現基準、21年度からの10年間の基準に抵触している高校が2つある。その地域の高校だからやめるとかやめないとかいう単純な話ではなく、その地域で新しく、例えば専門教育はどのような形で組み立て直したらよいのだろうか、あるいは普通教育も、そのことと関わってどのように組み立て直したらよいのだろうか、そのことに関する方向性を大まかにお出しするというのが、この会の役割だろうと認識していて、具体的にどこをやめる、やめないという話をするような、そういう提案

機能を持っているとは考えていない。

○委員

そういうこととお話しさせていただくと、公聴会に出かけてみて、なるほどと思って気づかされたことが大きく2つあった。1つが、江津会場の話の中で、「自分の子供がオープンスクールに行って何を見ているか」というところで、「生徒の顔が輝いていたか」ということがとても惹かれるとおっしゃっていて、それは本当にそのとおりというか、子供の表情はうそをつかない。魅力化とは何だということは、これから地域によって、学校によっていろいろな答え、方法があるとは思のだが、ここを忘れてはいけないということを感じた。隠岐島前高校の取り組みなどを見ていて、子供がよくなったり、生き生きすることに反対したり、嫌だという人はいない。地域の事情とか限界、大人の事情など、いろいろあるとは思いが、ここは絶対忘れてはいけないと感じた。

もう一つ、強く感じたのが、浜田会場の意見陳述者が、通学の費用負担のことを言っておられて、確かにそのとおりだと思った。私の高校時代も遠方から通ってくる、JRもバスもさほど都会に比べて利便性が良くない中で、お子さんとかその保護者にとって違うエリアの学校に通うということはすごく負担だということ、金銭面だけではないが、おっしゃっていたいろいろな言葉の端々から、すごく感じた。

一方で、今回の議論の前提だと思うのだが、これから人口減少社会を迎える中で、規模は確保して、魅力的な学校をつくらないといけないとある。ではどう負担軽減を図るのか、バスを走らせるとか、寮をつくるのか、費用負担するとか、いろいろなソリューションはあるとは思いが、この部分は当事者からすると大きな問題だと。個別に踏み込み過ぎかもしれないが、例えば江津で生まれたお子さんが、自分が普通高校に行きたいと思ったときに、他のエリアからしか選べないというのは、すごく大きな意味を持つのではないかと改めて思った。

前提として考えないといけないのは、本当にこの人口減少時代・社会の中の島根、特に石見がトプランナーだという中における学校の在り方、魅力的な、子供が生き生きできる学校というか、教育の在り方を考えると、最初から、工業教育とか商業教育と分けて考えること自体どうか。あと普通科教育の核という考え方も、核をつくるのかどうかも、もしかしたら検討材料かもしれないし、言葉の選び方自体から少し一緒に考えたいと思った。人口減少時代の学校の在り方は、もちろん簡単ではない。競争力や多様性などに対応しなければならない、規模を確保しなければならない中で、難しいとは思のだが、私自身、公聴会で感じたのは、なくすのは簡単、地域になくなるよりは、総合化を目指すほうがどちらかというと方向性なのか。私自身が感じたことなので、これが答えだというわけではないが、工業教育、商業教育、普通科教育という考え方をして固定化するよりは、もっとフラットに魅力的な教育の在り方、地域

にとって、生徒にとって、保護者にとってどうなのだろうかということをもう少し話し合ってみたい、議論してみたいと感じた。

○肥後会長

事務局も、1番と2番で個別に結論を出そうと考えているわけではなく、とりあえず今、こういう枠組みになっているので、そこから始まっているということで、この両方を議論していたら、要するに工業、商業、普通科と言わずに、もっと広い枠で考えようという結論になった、これはありだと思う。だから、今のご提案は全然間違っていないくて、この枠組みにとらわれる必要はないと思う。

○委員

普通科について少しお話をしたいと思う。専門教育の場合、就職する生徒もいるし、商業系のように半分は進学していく実態がある。ところが、普通科の場合は、ほとんどの場合が大学等へ進学をしていく。この点は少し違いがある。そうだとすれば、やはりそういう環境をきちんと整えてあげるとするのが妥当だろうと思う。この核というのは、将来的に少子化傾向が続いていくことは、まごうことなき事実だろうと思うので、先ほど言った普通科高校、大学進学ということを公聴会でも大分取り上げられたし、久保田市長もそうおっしゃっていた。そのことをきちんと整理しなければいけないだろうと思っている。そうした場合に、生徒間で切磋琢磨する教育環境をつくるという意味では、一定の集約をしていく必要もあるだろうと思う。ある程度生徒数を確保していく、そして、その上で学校の魅力化を図っていくことが、必要だろうと思う。その場合、基本的にその学校での生徒の学習意欲を維持していくためには、同じ目的を持つ学校同士が一緒になるのが、望ましいと思う。そういった環境が必要だろうと思う。その上で新しい高校になって、魅力化を図っていくのが適当であり、検討する必要があると思うし、個人的にはそれが正しいだろうと思う。

現在、教育の多様化とか、あるいは個性に応じた教育を国も進めており、教育再生実行会議では、そういう動きが当然出てきている。その趣旨を酌んでいけば、一つの手法として、中高一貫教育を志向していくというのは、十分考えられるし、全国的に見ても、島根県はその取り組みが少し遅れていると思う。併設型、中等教育学校、連携型といろいろあるわけだが、そのことは県が決めることで、方向性としては中高一貫教育を目指していけば、石見地域の普通科教育の核になり得るし、教育の振興にもつながっていくかもしれない。久保田市長もそういうご意見を持っておられたわけだが、私も何らかの動機づけが必要ではないかと思う。

○委員

浜田から中高一貫について声が出ているということだが、市長も言われたように、公立の中高一貫校がないのが、島根県を初めとする4県だけであるというお話だった。まさに、そうい

う面では、高校入試制度と一緒に、島根県独特のやり方をずっとやって来ているが、今後、県として中高一貫教育をどのようにされるかということも、次の計画の中で検討されることではないかと思う。

○肥後会長

中高一貫については、公立として全国的にはかなり先進的に取り組んでおられるところもあるので、そのことの成果や問題点も出てきている。少子化のこの地域でやったときに、どういう意味があって、どういうリスクがあるのかということも考えなければいけない、そういう段階に来ていると思う。

○委員

関連して、こんなに全国で中高一貫校があるということに驚いたのだが、なぜ島根にはないのか。

○事務局

ある特定の学校の在り方について、見解をどうこうまとめるというようなことをしているわけではなく、幅広くさまざまな教育の在り方について検討、あるいは情報を収集しながら、過去を振り返り、将来をにらみながら進めているのが教育行政である。中高一貫については、島根県の場合にはご承知のとおり、連携型の中高一貫教育校が2校ある。設置してから15年であるが、この15年の中で、連携型の長所、短所、そういったことは各高校、中学校、あるいは町の教育委員会とも十分情報のやりとりをさせてもらいながら、これでいいのか、もっと改善する方法がないのかということも、もちろん研究している。それから中高一貫に限らず、最初に申し上げたように、さまざま教育の体系があるので、そういったことについては、具体的な方向性を持っているわけではないが、研究、情報収集をしていることは事実である。今の段階ではそれ以上のことは申し上げるものがない。

○肥後会長

吉賀町は4中学校と吉賀高校、飯南町は飯南の2中学校と飯南高校という形だが、いわゆる中山間地の人口が減ってきたところの中学校と高校が連携して、連携型の一貫校をやるという意味合いと、浜田市中心部でそれをやるということの意味合いは、多少違うものがあって、その辺をどう考えるか、一つの議論のポイントではないかと思う。

○委員

浜田・江津エリアで導入を検討するかどうかということも、大きな論点だということを改めて感じたが、今後、この検討委員会の中で中高一貫ということテーマにした会があるか。

○肥後会長

今は浜田・江津地域のことをリーディング・スタディという形でやっているのだが、本題は

むしろ全県をどうするかということだし、もちろん、出雲、松江、そういうところに話が及んでいく。そのときに中高一貫校をどうするかのみがテーマにはならないと思うが、そういった仕組みも入れながら、よい高校教育をしていくためにはどうすればよいかという中で、中高一貫の話も出てくる可能性は当然ながらあるのではないかと考えている。

○委員

特に、集中的に研究する会がないのだとしたら、今のところの知見として県で感じているメリットとデメリットを簡単に教えていただけるとありがたい。

○肥後会長

そのことがこの委員会の中で少し問題になり、人口の多いところでの中高一貫教育をどう考えるのか、その先の高校入試をどう考えるのか、そういうことも高校の魅力化とか活性化とか、今後の高校の10年間でテーマになると皆さんがお考えであれば、関連する資料も当然ながら出てくるのではないかと。

○委員

中高一貫教育をやるとなれば、浜田市長が言っておられる併設型か中等教育学校しか、実態としてはないと思う。そういう併設型とか中等教育学校について、どのように考えているかということは議論の余地があるような気はする。

○肥後会長

すごく大事なことだと思う。要するに、教育課程が一本化されているかどうかというあたりが重要で、これは小・中連携も同じ話なのだが、教育課程に関する創意工夫が本気でなされているか、あるいは教育のマネジメントについてどういう体制なのかということだと思う。

○事務局

前回、8月に整理していただいた論点の多様な高校教育の選択肢をどのように提供すべきかという中で、中高一貫教育についても挙げていただいている。論点も既に整理されているので、その辺はご了解いただければと思う。先ほどあった、ご要望については、次回、中高一貫の特色、あるいは期待できる効果とか、先ほどあった連携型、併設型、中等教育学校といった形態、全国の設置状況等々について、資料等でお示ししたいと思っている。

また、委員からも中高一貫の状況を教えていただければ、この会での参考になると思っているので、お願いしたい。

○委員

(連携型以外の)中高一貫を導入してないから島根県もしたほうがよいと言うつもりはないが、この委員会では人口減少時代の中での、本当により高校の在り方、魅力的な高校の在り方とはなんだろうということを、考えたいと思っている。そういう意味でいろいろな選択肢を知

っておきたいので、ぜひ教えていただきたい。

○肥後会長

今おっしゃった人口が減ってくる、子供の数が減ってくるというときに、選択肢という言葉が一つのキーワードになっているのだが、教育を考える上で、豊かな教育とは何だろうと考えたときに、やはり選択肢が多いということはすごく大事なことのひとつである。例えば部活でも、この部活とこの部活しかないというよりも幾つかある中で選べるところなる、そのときの選択肢の生み出し方というのを、例えば小さな学校がたくさんあって、その中でと言われると、選択肢は減らざるを得ない。では、全部寄せて大きな高校にして、選択肢がたくさんあるのがいいのかという話になる。複数の小さい学校が部活のときは合同で活動するなどといったことも含めて、どういうやり方が一番いいのかということを考えないといけないと思う。

○委員

直観的に、例えば江津、あるいは浜田あたりで普通科高校の、いわゆる大学進学力を高めるための併設型の中高一貫校というのは、あまりうまくいかないのではないかと思う。強力な大学進学力を持った学校をつくるということになると、全県で1つ、中等教育学校をつくるとか、そういった大胆なことをやらないと難しい。人口減が起こっているようなところでは、なかなかうまくいかないのではないかと思う。私は、普通科、専門高校も含めた形の魅力化の在り方としては、山下市長が「例えば地域貢献学科みたいなものが一つ考えられるかもしれない」というご意見を発しておられるが、こういう形が一つ、人口減が進んでいるような地域での考え方かと思っている。この日曜日に、江津で地域創生フォーラムがあり、私も出かけてきた。江津市が今どういう動きをしておられるかということを知ってきたのだが、創造力特区へというキャッチフレーズで、非常にクリエイティブな町にしていこうという発想で動いておられることを聞き、これならば、例えば工業高校と普通科高校をあわせた地域貢献学科のようなものが、地域クリエイティブみたいな形でできるのではないかということを見ながら、江津の動きについて注目している。

○肥後会長

1点目は、人口減少地域での、いわゆる進学力ということを経済的な目標にした中高一貫をやっても、あまり効果が上がらないのではないかというご意見をいただいた。直観的にとおっしゃったが、やはり子供の数が少ないために競争力が上がらないということだろうか。

○委員

浜田とか益田あたりは、その地域の力を持っている中学生が集まっていると思う。

○肥後会長

それからもう1点は、普通科と工業科を一つにする考え方の一つとして、地域貢献学科とい

う学科をつくることもあるのではないかとおっしゃったと思う。

○委員

今のご意見、おもしろいというか、すてきだと思って拝聴したのだが、私も全国で地方創生とか、移住・定住関係の取材をしていると、やはり江津市は、海士か江津かと言われているくらい注目されている地域である。ビジネスプランコンテストで、どんどんUIターンの人が入ってきて、おもしろいまちづくりが起こり、空き店舗も埋まったということがある。そのように今とてもおもしろくなっている創造力特区と言っている江津の町と高校を切り離すことが、もったいないというか、むしろ町のおもしろさを持続可能にする、もちろんそのために高校があるわけではないが、全く切り離して考えるのはやはりもったいないというのを、取材をしていて感じている。そのために学校があるわけではなく、生徒が一番だと思うのだが、だからといって全く別物というのはもったいなさ過ぎると思う。

ただ、ポリテクと石見唯一の工業高校である江津工業の伝統・ブランド力を最大限生かし、その上で地域貢献とか普通科的なものを残しながら、生まれ育った子たちの選択肢を奪わないほうがいいと感じている。普通科高校と専門科高校がある中で、中学校の段階で自分の生き方を決めろというのは、難しいところもあるし、みんなもっとぼんやりしているのだと思う。特に、成人年齢が30歳といった話もある中で、みんなゆっくり大人になっていく中で、たまたま選んだところで既定される社会、今の日本は割とそうだと思うのだが、怖いし、もったいない。総合化みたいなことを何となくイメージしたのは、中学校3年生の段階で進路を決めて、こっちに行きなさい、あっちに行きなさいというよりは、もう少し子供の可能性に寄り添うというか、可能性を活かすような、地域として受けとめて送り出して、一部卒業生が戻ってくるということができるといいのではないか。そういう意味で、基盤としての地域はとても大切だと思った。

○肥後会長

今、江津市の話になっているが、人口的に言えば、中学校を卒業する子供の数が200人から160人まで減る。それを見越した上でどうなるのだろうということ、160人だからという話ではないが、その辺はどうかということも考えなければいけない。魅力的な新しい看板の学科を1個つくればいいと考えるだけでは、まとまらないかもしれない。

○委員

感想的なことになるが、地域公聴会に参加させてもらって、自分自身が出身校であるということ、いろいろな願いを持っているということもあるのだが、私が思っていた以上に、江津は元気だったと感じている。いろいろな観点の発想で意見を聞かせていただいたような気がする。観点としては、私たちが一生懸命この枠の中で考えようとしている外からの意見を持った大人

がたくさんいて、町を何とかつくっていかう、子供たちを育てようという、そんな思いを個人的には感じて、元気だと思ったところである。大胆な発想、やはり違った枠組みでつくっていくことも必要だということも、今とても得心をしているところである。先ほど会長がおっしゃった、子供たちの数が明らかに減っていくというのも現実で、その子供の数が減る中で競争力とか切磋琢磨とか魅力化とか特色とか、そんなものを全てつけていくにはどうしたらいいのかというのは、矛盾するが、どこで一致点を見出していくのか、そのときにエリアを江津、浜田と捉えるのか、もっと石見を広い視野で捉えないといけないのかと思っている。そうなったときには、中学校を出る子供たちが、江津の子が益田に行きたい、浜田の子がこっちへ行きたい、そのときの公的な保障、そこらあたりのケアも見越した取り組みがいて感じている。

話が変わるのだが、一つ教えて欲しい。この会が、大体月1回で12回を予定している中で、今回で約半分が終わる。そんな中で、最初に出していただいたこの会が目指す姿、目指すところというゴールは見せていただいているのだが、進行的には遅れているのかと思ったり、今回のことは、あと何回くらい相談ができるのか、もう少し絞り込んだこともしないといけないのか、見通しであったり、これからやるべきことはまだこれくらい残っているということをお話していただくと、こちらでも安心してお話ができると思う。

○肥後会長

諮問をいただいた県全体のことについて、31年度からの10年間ということをやらなければならぬので、それが最終目標。それに先立って、リーディング・スタディとして、江津、浜田の問題を議論している。結論を急いでいるわけではないが、全体のスケジュール感としては、こういう方向性で考えてみたらという大枠のご提言が年内を目処にまとめればと思っています。きょうは集中的に議論するには人数が少ないし、そのために多様なご意見をいただくことは難しい状況なので、あまり突っ込んでという感じはしているが、きょう出たいろいろな意見をもとに、次回11月にもう一回、大きな議論をさせていただいて、12月に一定の方向性が出ればいいと個人的には思っている。具体的話は、先ほどもふれたように県の方で考えるべきことなので、私どもとしてはこの問題については一応年内を目処に一定のまとめができればよいのではないかと考えて、県全体の31年度からの10年間のことについて先に進めていきたい。

○委員

県議会での教育長の答弁が出ているのだが、この検討委員会は江津・浜田エリアの今後の在り方を、「次期計画の基本理念を探るためのリーディング・スタディと位置づけて」と書いてある。このリーディング・スタディというのは、この浜田と江津の問題を県内全体で考える上での、先行的な位置づけにするという意図なのか。昨年からことしにかけて県へ提出された浜田市と江津市の要望書は、現行の計画だと統廃合を進めるのではないかという思いがあって出

されたと思う。そういう懸念が多いため、こうした誤解を早い段階で払拭しておく必要があると書いてあるのだが、現行計画に基づいて教育委員会が検討されるのは、ある面、当然という当たり前のことで、その基準は適応しませんということになると、何のための計画か分からなくなる。結局、現計画中の平成30年度までは何にもいじらないという位置づけを出したとも理解することができるのだが、普通に考えれば、統廃合基準に照らして教育委員会が何らかの判断をされるというのは当然のことではないかと思うのだが、その辺はいかがか。

○肥後会長

私がお答えすべき話かどうか分からないが、ここに書いてある統廃合基準は、次に示す場合には募集停止や近隣の高校との統合について検討すると書いてある。検討と書いてあるので、それをどう検討するかについて、この委員会ではどう考えるか、せつかくやっているのだから考えてみたらと言っていたのではないかと私は理解している。教育長答弁にある「誤解」というのは、「統廃合基準に当てはまったので、直ちに統合や募集停止をすると単純にとられてはいけない」、そういう意味での「誤解」である。検討の対象には当然なるのだが、その検討の方向性はさまざまにあるから、せつかくこの検討委員会をやっているのだから、いろいろな意見をもらって、そのことを受けて検討しようという考えだと思う。

○委員

先ほど、中高一貫の考え方で、全県的というお話が出た。私は必ずしもそうは思わないのだが、ただ、併設型を進めていく上で、場合によっては石見部全体、通学区域のことは細かいことなので事務局が考えると思うが、石見全体を巻き込んで考えたほうがいいたらと思う。そうすると、大田も益田も入ってくると思う。併設型は必ずしも併設の中学校だけから高校へ入るのではなく、一般入試を受けて入ることもできるので、そうすると場合によっては学区制のことにかかわるが、益田、大田もフリーにして、高校から入っていくというような形もとれる、いろいろな形が想定できるのではないかと思うので、そのことをある程度、検討していただければいい、そういう意味で言った。

○委員

もう一つ言い忘れたことがある。コーディネーターは、魅力化を進める上でも大事な存在だと思っている。地域公聴会でも「江津高校にも、コーディネーターがいたらいい」という意見もあった。今、中山間地域の学校にはそういうコーディネーターがいると思うのだが、これからは、魅力化とか高校の在り方を考える上でコーディネーターを置くことは、ぜひ検討してほしいというか、多分、必要不可欠である。なぜ必要かというところはいろいろな観点があるのだが、やはり先生がよい教育を提供するための負担軽減の意味でもあるし、地域と一緒にやってやるという意味でもあるし、やはりコーディネーターがいるといないとでは全然違うので、そ

こはぜひあるべき姿として検討していただきたい。

○委員

江津市、浜田市、それぞれ要望書を出されるに当たって、委員会を立ち上げて、議論を重ねてきておられるが、開催回数が3回とか4回という中で、この要望書をつくるためにつくられた検討会であったのではないかと思う。そもそもその学校を魅力化していく場合に、隠岐島前高校がされたような、学校、生徒、保護者、地域が一体となった協議会で議論を積み重ねていく中で未来像を描いていくというステップが必要で、県がこのようにやるのだと示すと、なかなかうまくいかないのではないか。

実は、きのう中四国の校長会の研究協議会が松山であり、その中で徳島県と広島県の中山間地離島の魅力化の報告があった。一つは、中山間地にある徳島県立那賀高校という学校で、普通科の高校と農業科の高校を一つにまとめた形の学校なのだが、進学重点の総合教養コース、福祉コース、農業コース、さらに林業の町のように、これから地域に数百人の林業従事者が必要だということで、未来構想の中で森林クリエイト科という新しい学科を立ち上げて、動くのだと言っておられた。やはり、これまでの取り組みを見ていると、教育振興協議会とか、そういった組織をきちんと立ち上げて、町を巻き込んだ議論を展開しておられる、町から相当な経済的なバックアップが得られるようになって、新しい学科の立ち上げまでに至ったという話があった。

それからもう一つは、広島県の大崎上島にある大崎海星高校、ここは在校生が70名という非常に小さな学校だが、ここも魅力化プロジェクトを推進しておられて、やはり外部人材の活用、いわゆる地域コーディネーターを積極的に活用しておられ、公営塾を立ち上げるとか、島前方式の形で活性化を進めておられる学校の話聞いてきた。ここだけの議論ではなくて、ボトムアップというか、地域の方々がどんな未来像を描いていかれるのかというところをしっかりと積み上げていく時間が、必要ではないかと強く感じる。

○委員

もう20年近く前だが、私学の全国の会で話題になる島根県の学校というのは松江北高校だった。今は、松江北高校の話は余り出てこなくて、出てくるのは、隠岐島前高校の話である。先月開催された全国の私学の会でも、やはり隠岐島前高校の話が出ていた。それから、5月の終わりに開催された全国校長会のある発表の中でも隠岐島前高校が取り上げられていた。今、隠岐島前高校だけではなく、中山間地域の学校にもいろいろなスタッフが配置されているので、話を聞かせてもらって、この会の議論を活性化してみたら、よりいいものが出るのではないかと思う。

○肥後会長

各高校の魅力化とか活性化とか、あるいはコーディネーターの配置がどういう意味を持つのか、そういうことに関してはお話しいただいて、データもあろうかと思うので、お願いしたい。

○委員

総合学科的な話もあったが、正直、人数が決まっている上で、総合学科にすれば一時的には増えるかもしれないが、だんだんまた落ちていくのは目に見えていると思う。それであれば、この間の公聴会でもあったが、工業であればポリテクも含めて、石見部全てをエリアにして、よそから引っ張ってくるぐらいの考え方、進め方でもよいと思っている。それと、普通科に関しては、いろいろ話もあるが、本当に江津の子で大学進学、上を狙っていこうと思う子は、浜高に行くか、石見智翠館高校に進んでいるのが現状だと思う。そうしたときに、江津高校が生き残っていく方法を考えると、中山間地域の魅力化校があるが、人数的にはおそらく変わらないし、江津市もいろいろ若い方が力を入れているので、中山間地域の魅力化校と同じように学校と行政、地域、そして企業が手をとる、そういう学校が一つあってもよいと思っている。

それと、子供たちの選択肢もそうだが、やはり地元企業が生き残っていく上で、専門高校がなくなると、県外、または大学を卒業した子を引っ張ってくるのは非常に厳しいので、何とか石見全体で考えて、そういう専門高校の特化した在り方を考えていただけたらうれしい。

○委員

人口減少のトップランナーの島根県西部、島根県全体としてどういうものが在り方としていいのか、今の島根の取り組みは全国の中でも最先端で注目されているので、ここでどういう教育ができるかということが日本の未来にもつながってくると思う。そういう意味で、変に現実的な妥協をする議論よりは、皆さんの普段の知見を活かして、こうがいいのではないかとぶつけ合って、その中から出てくる何かを現実的にまとめていくほうがよいと、今までの議論、公聴会を経て思うようになった。

○委員

最初に質問すればよかったかもしれないが、浜田でも江津でも、特色づくりの中で、国際化教育とかグローバル教育という観点は、基本的にはなかったのか。リーディング・スタディということで、これは県全体の問題でもあると思うのだが、先程からずっと出ているように、少子化の話はどんどん出ているし、最初のほうのこの会で県立高校の位置づけというか、その中でどういう生徒を受け入れるかという話も聞かせていただいたが、確かに島根県は人口減少率が大きいですが、日本全体が人口減になっていて、一方で世界の人口は増えているし、またアジアの人口も増えている。海外に行くとかではなく、海外との付き合いというのはどんどんこれから増やしていかなければならない、これは都会だけの問題ではなく地方でも同様だと思う。偏

見かもしれないが、以前は、島根県の高校、特に普通科高校というか、進学校はあまりそういうことに熱心ではなかった。最近、普通科高校のその辺のやり方が変わってきている。普通科高校だけではなく、さっき隠岐島前高校の話が出たが、あそこもSGHになって、海外との交流、あるいはそういうグローバル的な視点で物事を考えることの大切さ、ローカルとグローバルでグローバルということもされているが、そういうことを島根県では特に考えていかないと、地方の学校、公立、私立も含めてどこかから生徒をとってくるだけでは、国内の限られたパイの中では限界があると思う。そういう視点も、この江津、浜田もそうだし、県内全体を考える上で必要な観点であり、議論してみたらどうかと思う。

○肥後会長

実際、出雲地区のある小学校では、外国からの子供がすごく増えていて、それに対応する教員を確保しなければならないという問題が起きていると聞く。それから、県内企業があるところには、そういった外国の方も来ている現状がある。逆に言えば、海外からでも学びに来たいような、そういう魅力化も一つ考えなければ、バカロレアの観点もあるが、そういったことも今後入れていかなければならないだろう。

私の個人的な印象だが、工業、商業というよりは、高校を地域と結びつけた教育機関として組み立て直すときに、何かキーワードが要るのだろうと前回の議論で感じた。例えば、江津の人たちは「ものづくり」という言葉を何回も使われた。ものづくりに熱意を持った子供、ものづくりの担い手としてその資質や能力を磨いていく、そういう高校にするのだという基本的なコンセプトがあって、その中で教育の中身としては、従来の工業高校が担っていた学科が中心となる部分もあるだろうし、しかしそれだけではなく新たな（たとえば商業的な）学科も必要という話になるかもしれない。地域貢献人材育成みたいなことも一つの目標、キーワードとしてあるのかもしれない。それから、国際コミュニケーション力を持つとか、そういった国際的ということの一つのキーワードにしてつくっていく（それが単科の高校として成り立つかということとは別だが）そういう一つのキーワードで人材育成を目指していくと考えて、今までの工業だ、商業だという枠組みから一歩抜けた議論をしてみる必要もあるのではないか。皆さんの意見を伺いながらそんなふう感じた。学科編成の難しさとか、それを支えていく先生方の配置とか、さまざまな現実的な問題が起きると思うが、その前に、やはり今からその地域の子供たちがこの地域で何を指すのかということがわかりやすいキーワードになって、そういうことが伝わりやすい形で高校を魅力化していく、そういう方法はあるだろうと思った。

○委員

浜田、江津が中心の論議になっているが、専門教育に関しても、それから中高一貫教育に関しても、実際は益田、大田も含めた石見部全体の論議をやはりしておくべきではないか。そこ

が何となく違和感があるというか、抜け落ちている部分があるのではないか。公聴会も2カ所でやったのだが、本当は石見部全体で、中山間部も含めてやればよかったのではと感じている。

○肥後会長

統廃合基準が、要するに高校単位で書かれているので、こうなった高校については検討の対象になると書かれているが、先ほど申し上げたように、それを検討するときには、その高校のことを検討するよりも、その高校が位置づいている地域をどこまで広げて考えるかという課題に当然なっていくので、委員ご指摘のとおりで、どこまでそれを広げて考えるのかということも、一つ論点として入ってくると思う。

3 教育監あいさつ

本日はどうもありがとうございました。今、岩手国体が開催されており、きょうから後半に入りました。中高生が所属する少年の部で、島根県の子供たちは大活躍してくれております。本日お見えの委員の学校の2人のテニス部員も大活躍でございました。部活動に限らず、学びを含めたさまざまな分野で、子供たちが光り輝くような高校をつくるためにはどうすればいいか、そういった視点で、どうぞ遠慮なく、ご忌憚なく意見を言っていただけたらと思っております。過去の県にいただいた答申を見ますと、その答申に至るまでの議事録が現在も公開されており、一つ一つその議事録を見ると、さまざまな意見が出てきている、そういったさまざまな意見を踏まえて、答申としてまとめていただいた、そういう経緯が見えるようになっておりますので、どうぞ遠慮なく、事務局がこんなことを言ったら困るのではないかとか、そんなことはみじんも気にされず、奔放に言っていただけたらと思っております。そのほうが未来を担う子供たちにとって魅力ある高校づくりにつながるのではないかとと思っております。

先般の地域公聴会に続き、本日は台風の影響で急なご欠席の委員様もおられる中で、熱心にご議論いただきましてありがとうございました。また、1カ月後に向けて、事務局もまた必要な資料を提供するべく準備して参りたいと思っております。今後とも引き続きよろしく願いいたします。本日はどうもありがとうございました。